

この頭脳から、日本の近代は始まった

限定三八〇部復刻

大村益次郎

大村益次郎先生
伝記刊行会編著

マツノ書店

内容見本

大村益次郎

七三〇

せしめたので、これがために會津は枝幹を杜絶されて、援軍を得ることができず、つひに落城の憂き目に遭つたのである。

尤も會津討伐における官軍は、仲々の苦戦であつた。板垣退助・伊地知正治等の如き實戦における體驗者であり、かつ有能の戰略家が、想を錬り智を絞つたのにも拘らず、城兵の挺身勇戦に阻まれ、容易に陥落しなかつたのである。當時、會津を陥すには攻城砲が必要だといつて先生に迫つた者があつたが、先生は兵隊を見ること神の如く、すでに最初から落城の見透しをつけてゐた。これに就いては後年、子爵會我祐準が左の如く語つてゐる。

これは人から聞いたことだが、會津の城を攻めるには、攻城砲がなくてはとてできないから、どうか徳川から分捕した攻城砲を渡して貰ひたいといふことを、わざわざ人をのぼらせ、東京に請求してきたさうだ。ところが先生がいられるには、それはやるにおよびませぬ。そのわけは攻城砲だと目方がこれこれ何貫目である。さうすればこれに要する人足が何人である。さすれば一日五里とか六里しか運べない。それゆゑに先方に砲が着するのは何日である。その頃は、ちやうど落城時分になりますといはれて、一向取上げなかつた。ところが、

大村益次郎没後130周年記念

一一、長州藩の兵制改革

安政の大獄によつて、先生の心境にも、この時局的色彩が濃厚に襲つてきたはずでもあるが、當時の先生はたいして心境に動きをみせなかつたことは、先生の日記や備忘録に現はれてゐる。そのころ先生は鳩居堂・講武所・蕃書調所の間を繁しく往来してゐたのである。先生は幕府・宇和島藩・加賀藩その他によつて、生活は豊かであつた。また學者としての名聲は高く、比較的平和な生活であつた。したがつて先生は、今日まで國事に關する會合にも加はらず、また悲憤慷慨の士と往來することもなかつたので、尊皇攘夷の相談をかける者もなく、専ら蘭學者として、西洋兵學者として生きてゆけばいい立場におかれてゐた。それに先生は洋學を修めてゐるだけに、偏狭な攘夷の愚かさをよく知つてをり、また幕府の祿を食んでゐるので、多少に拘らず幕府の考へ方にも傾き、攘夷問題に觸れることを好まなかつた。まして物事に恬淡である先生は、攘夷論者の熱情的行動に加はることを極力避けてゐた。

第七章 宇和島藩出仕

二二五

大村益次郎

四五四

とある。先生はすでに和蘭の兵書と日本の軍學とを折衷して、先生一流の兵學を編み出し、これを實戦に試みてゐたのであるが、先生の信念は「人間が戦場に出たからとて、さう滅多に鐵砲弾にあたるものではない。またあたれば、そこで勇しく死ぬまでのことではないか」といふのであつた。先生の敵に對する攻撃精神は、ここに存するやうに思はれる。

次に、陣中に於ける先生の逸事を描けば、長州藩兵が横田川を渡らうとした時、橋がなかつた。その時、先生はただ一人で附近の農家に行つて「舟を出してくれまいか」と頼んだ。百姓は戦争の真只中のこと、命惜しさに舟を出し澁つたが、それを見ると先生は懷中から無造作に、金子十兩を掴み出して「これを酒手にやるから、出してくれ」といつた。當時の十兩といへば大金である。驚いた百姓は、そこで命がけて舟を出したが、先生は一人で對岸に渡つて、その状況を丹念に調査して歸り、翌日兵を進めた。けれども橋もなく、舟も充分でないので、兵が躊躇してゐると、先生は突然大聲で「大隊、飛込み」と號令を下した。兵たちは怒つた。そこで疍癩のあまり、無鐵砲に川を渡つて對岸の敵に突込んだが、かくてその日の戦争に大勝利を得た。歸る時には、ちやんと假橋が架かつてゐた。先生は「敵に突込む時は、疍癩を起してかかるぐらゐでなければい

最高最大の大村益次郎伝

内田 伸



現在、大村益次郎の伝記は四十数冊を数えることができる。大村伝は太平洋戦争中に十冊を超えるものが出版されているが、さらに近年、司馬遼太郎の大村益次郎を主人公とした小説『花神』を、昭和五十二年のNHKの大河ドラマでとり上げたので、いわゆる花神ブームとなり、それに便乗して大村伝が多く出た。花神ブーム時の伝記は、小説『花神』を下敷きにしたものがあって、フィクションが真実のように書かれているものが多く、史料の価値のあるものは無い。

大村伝で史料的価値のあるものとしては、わずかに二冊であるといつてよい。一冊は大正八年出版の村田峯次郎著『大村益次郎先生事蹟』で、もう一冊は昭和十九年出版の、大村益次郎先生伝記刊行会編『大村益次郎』である。村田峯次郎は明治二十五年に『大村益次郎先生伝』を出版しており、大正出版のものはそれを充実したものであるが、後半に大村に面識のあった人びとの談話などが多くあって貴重である。(この談話集は、昭和五十三年、マツノ書店で復刻出版した。)

大村益次郎先生伝記刊行会編の『大村益次郎』は昭和十九年発行で、千ページを超える大冊である。さすが伝記刊行会を組織しての仕事であり内容は充実している。それは今までも門外不出であった大村子爵家蔵の史料が根底となつていからである。現在大村家蔵の大村益次郎史料は、全部山口県文書館に寄託されているが、その中には史料として貴重な大村の洋学塾の鳩居堂入門簿や日記、大村使用の西洋手帳などが無い。大村家の話では、疎開荷物が途中でいくつか紛失したということであるが、それに入っていたものであろうか。

ところが有難いことに、この大村伝には鳩居堂入門簿全部が載っている。この本が無かつたら、鳩居堂の大村門人は今は全くわからない状態といふべきであつた。このように、この外に大村の日記や覚書などで、もうこの大村伝以外には記録が無いというものがいくつもある。そうするとこの大村伝の価値は何ものにも換え難く、維新史料としてもたいへん価値の高いものといふべきである。

第一 出生と家系

出生とその時代 先生の家系

第二 少年時代

第三 修業時代(上)

梅田幽齋の學塾入門

第四 修業時代(中)

廣瀬淡窓の學塾入門

學則その他 講授書目と進級規程

先生の勉學成績

先生の塾中の勤静と詩作

兵制改革の思想養成

再び梅田の塾入門

第五 修業時代(下)

緒方洪庵の適塾入門

塾の學風と塾生

ゾーフ部屋

長崎遊學と適塾塾頭

第六 醫術開業

郷里に醫術開業

先生の結婚

第七 宇和島藩出仕

宇和島藩の蘭學及び醫學

伊達宗城時代における蘭學及び醫學

高野長英後の先生

先生の造船事業

江戸で鳩居堂開塾

番書調所教授方手傳

講武所教授

「安政五年歸省日記」に現はれたる簡素旅行

女囚の死體解剖

先生の碓岩屋玄藏有備館蘭學教授

安政の政局

長州藩の兵制改革

第八 長州藩出仕

青木周弼 桂小五郎等の推薦

英語修學

竹島開拓問題

博習堂規約

北方問題

恩師緒方洪庵に酬ゆ

第九 長州藩の政情

討幕と攘夷

先生來原良藏の自刃を嘆く

長州藩の攘夷

洋行者の旅費調達

先生藩地に歸る

八月十八日の政變

但馬・生野の擧兵

第十 長州初征

元治甲子の變

四國艦隊の下關砲撃

長州征討

第十一 長州再征

長州藩の革新派

薩長聯合

長州再征と將軍の進發

四境戦争

先生の戦術及び陣中の逸事

幕軍の敗戦

第十二 長州藩の出兵問題

四境戦争後の先生

兵庫開港と長州處分

討幕に關する先生の出兵尙早論

長州藩の出兵東上

第十三 新日本の興隆

王政復古の序曲

長州藩主父子及び七卿等の恩赦

王政復古の大號令を渙發

小御所會議

政局の危機

第十四 新政權の誕生

舊權力の顛落と新權力の勃興

鳥羽伏見戦争

幕軍の敗北

第十五 先生の新政府任官

長州藩及び先生の態度

先生の軍防事務局出仕

行政機構の簡素化

第十六 東征軍江戸城進撃

東征大總督有栖川宮煇仁親王御進發

慶喜恭順と江戸城明渡その後の政情

第十七 先生と彰義隊

先生の東下

彰義隊の組織及びその経過

彰義隊討伐

第十八 先生と東北平定

奥羽諸藩の反逆

會津戦争と政治的諸問題

木戸孝允の日記

手紙に現はれたる先生

第十九 先生的光榮

大刀料三百兩下賜

老父に光榮を頒つ

大村益次郎 目次

第二十二 先生の遺難	先生の西下及び巡回視察	遺難の實況	遭難の創傷に關する再検討	兇行事件當夜の京都	旅寓における治療と警衛	飛報東京に達す	兇徒捜索の布達	第二十三 先生の逝去	病狀漸次に悪化	病牀に國事を憂ふ最後の手紙	兇徒の捕縛處刑及び停刑事件	第二十四 靖國神社と櫻樹	靖國神社の創始	櫻樹の植込み	第二十五 大村神社	創立の由來	鎮座祭詞寫	由緒	故大村兵部大輔贈從三位大村公神道碑	大村神社奉贊會設立	第二十六 靖國神社境内の先生の銅像建設	皇族の御贊助を得て銅像建設	銅像護國の英靈を守る	第二十七 大村益次郎遺難之碑	記録の發見	大村兵部大輔埋腿骨之地碑	第二十九 兵部大輔大村益次郎卿殉難報國之碑	發端	建設の趣旨
------------	-------------	-------	--------------	-----------	-------------	---------	---------	------------	---------	---------------	---------------	--------------	---------	--------	-----------	-------	-------	----	-------------------	-----------	---------------------	---------------	------------	----------------	-------	--------------	-----------------------	----	-------

經過 記念碑竣工式 記念大講演會 並に映畫上映

第三十 先生の全貌

英國公使パークスに國民皆兵を説く

先生の風貌 嫌ひなもの三つ

(1)洋服嫌ひ (2)寫眞嫌ひ (3)船嫌ひ

軍に節約主義適用

軍紀振肅

軍務に従ふは健康から

軍費の誤算を修正

軍事指令至急報

戦況ニュース兼官報發行

靴と兵隊

凱旋の勇士を豆腐で稿ふ

剣道無修業

官紀肅正

時間嚴守

粗食節約

卓越せる經濟眼

無愛想の挨拶

書骨董趣味

大西郷と大村

膽氣豪勇・言行俊警

兵隊を差向ける

北方の護り堅く

常識を發達させよ

外人崇拜排撃

先生の信念

大陸政策

明快緻密の英傑

先生と海江田信義

先生と青木周弼

著譯書・日記・備忘録

参考文献

①緒方洪庵舊宅及び適々齋塾について(圖解)

②海軍銃卒練習軌範

③弟子籍(鳩居堂)

④トコトンヤレぶし

⑤大村兵部大輔負傷の件

⑥兵部大輔殿入院 件

⑦刺客の口供

大村益次郎年譜

▼千頁を超える大著なので、今後また復刻される可能性はありません。

▼この機会に豪華新装の復刻版を、ぜひ「予約特価」でお求め下さい。

▼分割払いに応じます。

▼日本の近代を築き上げた大人物の双璧。それは吉田松陰と大村益次郎である。両者は共に卓越した学者であり、実践家であった。その学殖と人格によって松陰は思想に、大村は技術に、それぞれ強烈な個性を發揮した。そして共に國家に殉じ、悲壯な最期を遂げている。

▼この「大村益次郎」は、数多い大村関係書の中で最高最大のものである。門外不出のあらゆる史料を駆使して作られており、今後本書をしのぐ伝記は現われなるといわれている。

▼本書は複雑多岐にわたる幕末維新史を巧みに記述しつつ、その中で大村の人物とその事蹟を描いており、本書を読むことにより維新の動向をも掴むこともできるという完結した構成をもつ。またその文章は、描かれている大村の性格そのままに、史料の端々に至るまで、あくまでも正確、平明、簡潔を旨としており、きわめて読みやすい。

▼「大村益次郎先生伝記刊行会」によって企画された、太平洋戦争末期の昭和十九年に二十部だけ刊行された本書は、材質・製本共に劣悪な本であるにもかかわらず古書価格は四万円を超え、それでも全国どこでも古書店にも姿を見せず、今やほとんど入手不可能となっている。

■体裁 A5判一五〇頁
■定価 二万円(千520)
■予約特価 一万八千円
■特価締切 11年6月20日
■発売 11年7月下旬
■限定三八〇部(番号入り)

徳山市銀座の一三
〇八三四二九五
マツノ書店